事情

明治太平記

七編

上

村井静馬著

へ遠14
2504
26-13

特14 遠へ門
2504
26-13

村井靜馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記 全

東京書林 延壽堂發兌

明治初年來の事件に於ても實に天下の大變革にして而して今日の開化に至まる迄の顛末を明治太平記と題し僕あれを閲するに卷中總て傍訓を加へ殊更數丁の有像なれば婦幼と雖も了解し易く居ながらにして當時の事實を目擊するが如くなる故稚童等讀むに隨ひて稗益なること尤多し仍て是等の數言を記して半頁の餘紙を塞ぐ

官許明治八年十一月廿八日出板　一壽老人記

江藤
新平

島義勇

前山
精一郎

あら紙ばかりハ
ゆゝしき紙
捨手
西方国へ
はなちやる
うきよ
夏の
かりうた

徳久
幸次郎
の妻

官兵漸次ニ佐賀縣下ニ進撃シ
各所ニおゐて接戦ニ及ぶヨ始まり
賊徒等勢ひ究まりて遂ニ開城
降伏あるいハ脱走あるニ終る

巻之弐

内務卿諸縣ニ令して脱徒等乃踪
蹟を嚴しく探索せらるゝ起り
巨魁江藤等四國ニ落魄し艱難憂苦
ふ日を経るうち天網竟ふ身ふ及ふ終る

明治太平記七編巻之一

東京　村井静馬著

偖も二月廿二日官軍の兵二大隊を発し近縣の貫
属隊を案内者として前驅あさしめ飯塚といふより
三ツ瀬越を経て朝日山へと進ミ向ふヨ此地ヨ賊軍若干
いろ〻険阻ヨ據て陣を布き山岳の間ヨ出没して敵を目
下ふ見ておゝ頻りふ狙撃ふ程ふ之が為ヨ官兵疲弊
ふ者いろと雖も更ヨ屈まる気色もなく躬方も砲を

打立々々各前を争ひて遂に險阻を攀登り賊の屯所を
攻蒐る勢ひ最も烈しければ賊徒も這所を破られ
じと防戦の手を盡ひども死傷の者の多くして
去る能はず支ゆる支を得ずして是非なく所々に放火して
咸散々に逃去る因て官兵須臾の間に朝日山の要
衝を攻取り手初めよと勇を立て尚も逃る賊を追ひ
掛けつゝ中原驛まで進みたり此日また鎮臺兵を
筑後川をうち渡り豆津に屯集ふを所の賊兵

追ひ退け江見六田辺に至りしが日も既に没し
れば這所に休息に及びしが此夜賊兵大挙して
再び江見の陣営を襲ひ烈しく砲撃に及びしに
其事不意に出る故官兵大いに狼狽して討る
者十餘名堪へず備へを乱せしが左右に隊伍を
正し遂に其場を斫破りて軈て西尾に陣取りて
偖また中原驛に至りし彼の一隊の官兵は廿三日
の早天に同驛を進発して目田原といふ所に陣

せし賊徒等を撃んとて苦野と云る所より進めべ
又鎮臺の兵士等も之が應援をさんとて俱に苦野に
着陣かしこ茲にて兵を合して進んで寒水村に至れば
賊徒等廣野に胸壁を構へ深林の要地に據りて
乱射する丈雨の如く道ゞ進を兼るゆゑ官兵
一隊を山手に廻し横を討んと図りしに此地は賊兵
數日前より計策を定めて要路に兵を占たる丈ゆ
戦ひ數刻に及ぶと雖も攻破る丈慥なる官
軍地理を失ひて進退困苦の場に臨めどおのゝ死
憤の勢ひ烈しく更に一歩も退らず賊の激砲烈
しきを些とも怕ず気色なく躬方の死骸を楯と
して潛かに打ち伏して撃つ並々ならぬ難場の
抗戦左右まろうち賊の前隊二十人程うち仆され
尠し怯まで見へたる故官兵得たりと筒を揃へて
打立々々打疎むるゆゑ遂に乱れて敗散
勝に乗じて追蒐けしゆゑ渠等い地理に慣たる

支史山谷或い樹林ふんどく疾くも踪蹟をくらま
しく乍ち見へぎりしくべ官軍更よ手分とるしく
一隊い本道より進む其餘を左右い支道より進む
て聽く廣野を打過ぎち菩野の村中ふ入らんと
もる時此村の出口ふも賊まさ胸壁を嚴しく
構へ大小砲を備へ置きく頻りふ之を放ち掛ると
官兵もまさ之ふ應ト三方よりして打立ると須
臾も絶間なくざれべ砲烟乍ち天地を掩ひく黑

白も判ぎりたる中より賊徒等或い鎗を捻り或ハ
劍をうち振りあどしく這方の陣へ斫り入るよぞ
官兵もまさ之よ當りて力戰數合よ及ぶらとふ賊兵
遂よ鋒先衰へ彼の胸壁をも保ち得ぎ兵器を棄く
敗走ふまを官軍烈しく追逼りく稍神崎ぎ至
りしふ賊の隊將鍋島一之丞等乱軍のうちよ
擊きしくべ餘賊いよく力を失ひ咸散々よ逃失
しぐ此時既よ黄昏よ至れば官軍ふも兵を收く

砲烟中ヨリ雨ノ如ク軍大ニ力戦ス

茲ゝ宿陣ふ程ゝ此勢ひと拔まゝ翌日ハ佐賀城を襲撃ゝんと將士等軍議ゝ及びゝ此日ハ頗る苦戰ゝて石川陸軍の大尉をはじめ將兵のうちゝ斃を負へる者七八名其他士卒ゝ至りて死傷の者も尠からぬも咸尽力して甚ざ難戰ゝ労しゝ先づ次の日ハ休戰と決しゝ只大斥候をのゝ出しゝ城下と探索ゝせしゝど此日熊本の鎮臺兵ゝ合併ゝ佐賀縣の正

義隊彼の前山精一郎ゝ郷ゝ引卒せゝ輩ゝ神崎の陣営ゝ来りて附属為たりゝ官軍のよく勢ひと増ゝて頻りゝ城攻の手配りゝ及び廿六日の黎明ゝ總軍神崎の陣を発ゝゝ城下ゝ逼らんとする程ゝ賊徒等半途ゝあゝ泛邀へゝ姑く防戰為たりゝゝ堂々たる官軍ゝ争ひ敵まる支と得べき漸次ゝ兵を引退け道路の槁と切落ゝて固く戍ると專らゝゝ敢て戰ひと好まゝゝ諸將等賊情と察

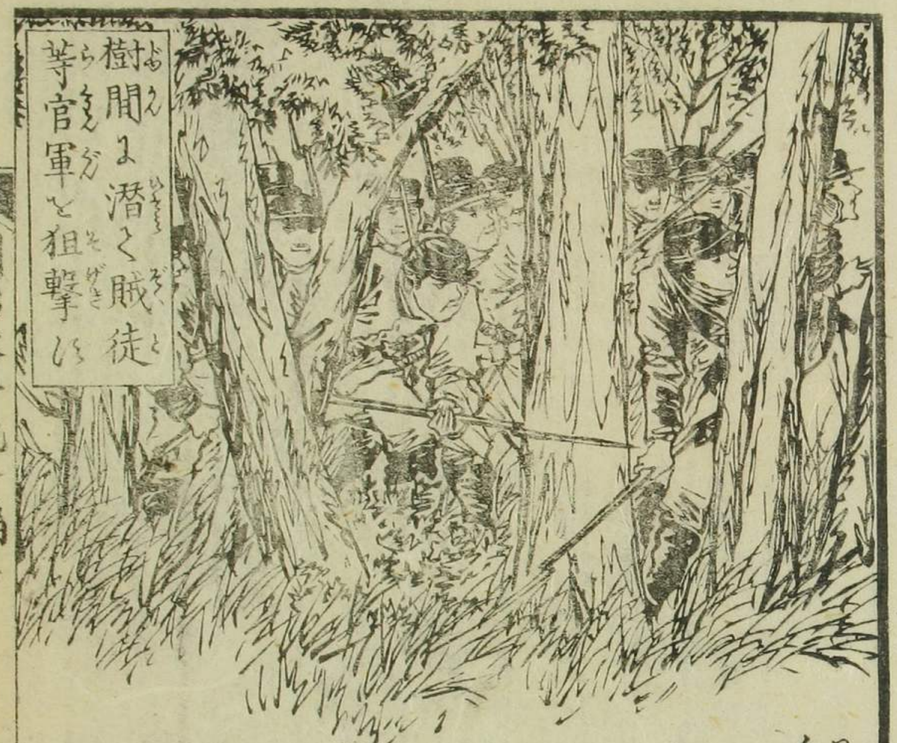
るゝ必ず篭城の覚悟あらんと其旨福岡の本営より注進に及ぶべきぞ是に於て内務卿よりも東駅まで出張せらるゝ廣島の鎮臺兵及び小倉の貫属隊おど急速出張催促せらるゝ且東京へも羽檄を飛ばし銃砲弾薬の類ひとべ陸軍省より取寄せらる是より先福岡縣の士族等ハ佐賀の暴徒に煽動せらるゝ既に方向を誤らんとせし同縣の権参事山根秀助が説諭によりて何れも解悟為しが故に

盟書を権参事に呈して賊徒征討の支度をなし一臂の力を尽さんと請へり是に於て山口縣の小属吉田唯一なる者を貫属隊の監督に命じ銃器弾薬を分與へて三瀬越ふと進むに余程に福岡縣の士族等を迷雲一時に晴るゝより誰が憤発做ざるべき總勢等しく間道を経て三瀬口まで至りし折しも豫て這所等の山林に賊徒等妻人數潜伏して敵の来るを竢居し支度忽然として左右なる

茂林の裡より狙撃ふしたる弾丸宛然雨の如く頭上
ふ注ぎかるるぞ瞬間ゐ五六名撃ぎく斃ふ仆るも
いり痍を負ふ者も尠ゝわば隊中大いふ狼狽ふ
もの〻筒を撓ふふ虚間ふく堪へぞ崩ぎく逃走るを
賊兵得たりと追逼りて或い鎗をもりめりしまさい
太刀を打振りふどしく餘いせドと砕く蒐れる
勢ひ竹を破るが如く當りがくぞ見へふる固り
福岡の貫属隊も柔弱ありと言ふいりぞ殊更

隣縣の士族ふしく互ひふ恥を知る中ゐ死を
只一挙ゐ決して取ッく返して戦へども不意を打
ぎし支ふ是バ躬方の駈引合箇せぞ敵いまふく
機ゐ乗ドく推捕稠ッ討んとせしぐあいや福岡の
一隊ハ死地ゐ入りぬと見へたる所へ豫く内務卿の
命ゐりり小倉縣の貫属隊ぐ其勢凡そ五百餘人
援兵ゐして出張せしぐ此時爰ゐ馳着きり此形勢
を見るりも勝恃りたる賊兵の横合りして撃く

掛まべ思ひ切る死敵の新手ふ賊兵大いふ駭きて
之を支へんと做ま程ふ蘓生りたる心地せ一福岡の
一隊い躬方の援兵来りしぞ進め者ども と喚いつ
つ死憤の勇を奮ひしゑ今いさゑ賊徒等も左右ふ
敵を引受たるよ弾薬も稍乏しくれば遂よ敵ま
る支を得ま咄と崩まて敗散あまと汚ま
返せと喚うみゑ福岡小倉
の二隊の兵士等烈しく



樹間よ潜く賊徒
等官軍を狙撃ひ

追撃みせる支既ふ数
町ふ及びしふ賊の逃
足疾うしゑ半途
みく兵と纏め要
所よ據りて陣列せ
り余れば又佐賀の
城内ふ江藤島の両
氏を始め征韓論を

主張なる暴徒等許多集會して綜を挙んと図る
うち官軍疾く進撃して追日争戦に及びしに屢
敗績に及ぶをりて防禦に苦しむ所より所口の橋
を切落して敵の寄せ来る道を妨げ徒なして又
城中にも頻りに衆議を疑ひて雖も寄手の大軍
漸次に進ずるを敵しがたしと思ふより始めの英気
大いに衰へ衆口あのく異論を吐きく或は篭城と
もゝしと言ひ或い恭順降伏を議まれば紛紜として

一定せざる遂に黨中隅意我生ドる窃ふに城中より
脱走する者日を追ふて尠うなる士氣漸々に衰へより
尓ばまた官軍に於ては廿六日の戦ひ大いに勝利を
得たりしに此機會を失ふべ直ちに佐賀城を
攻撃ふんと廿七日の早天に總軍を三道に分ち
境原駅に進ずしに賊徒等のうちに於て死を決し
たる逞兵ど此所に對陣して稍接戦に及ぶ程に三
手の官軍筒を揃へて烈しく乱射に及ぶと雖も賊

兵更に屈する色なく互ひに挑み争ふ支終日ふしく勝敗決せず果ハ弾薬も撃尽しく刀鎗その他思々に已ゞ得物を携へて敵も躬方も入乱れて奮戦なを支数合に及べば死傷の者も尠からねど斃るく死骸を踏越へ飛越へ双方一歩も退らずと息ともに喘ぐまで打合ひしゝが賊軍遂に精根尽きく城下の方へ引上る官軍尚も追ひすがりて撃ちめんと為る時茲に蓮池の賊黨ハ半途に出て遮りしゝが官兵ハ之に當りて須臾戦ふ其虚間に以前の佐賀の労兵ハ辛く脱ぬく馳走りぬ亦れば蓮池の賊徒等も躬方の危急と見し故に僅かに支へハ為つれども固是小勢なれば争で大軍に當り得ん且戦ひ且走るを官兵焦ッく追蒐つ此虚に乗じく佐賀城まで逼らんと為つれども日も既に西に傾きたれば隊将令しく兵を集めく要地に其夜ハ野陣を布く若敵方より夜撃やせんと兵器を連ね

番兵を置きて最厳重に備へる徒て次の日
官軍は人稍城攻の手配をし總勢野陣を進発
して蓮池に出陣せり久保山に賊兵なうて官
軍の進撃する枝支ゆべきの所へ人を直ちに一手
の兵を遣りて件の山砲攻しむるに果して許多の
賊兵等山に據りて甘堂場と構へ官軍寄せると
見るよりも眼下に俯して砲を放ち弾丸頭上に
落ちて紙を面を向くべきもあき砲官兵

些とも臆する躰かく這方よりも砲を発して戦ひ半
ばに折る時分を測り大砲隊より破裂丸を打ち
蒐なりしが其弾丸甘堂場の上に破裂し是が為に
賊徒等が死傷最も尠なくして残兵堪へず兵器
を棄て山手の方へ逃入るあぞ官軍輙く甘堂場を
奪取り直ちに山上の敵を撃んと銃を発して攀
登る此時久保山の頂嶺に賊の隊将久留島
某山陣を設けて衆賊と倶に守りて宜しく

賊兵窮し
佐賀城を
逃亡す

官軍を防がんとせしが一挙に臺場を攻取られて大いに英気を挫ぎ然れども久留島ハ勇氣鋭き猛士なれバ自ら陣頭に進み出士卒を諫め激まして登らんとする官兵に數挺の砲を差向けて拳下りに連発きすれバ官軍頭に找きうゝ孫く双方姑く撃合ひしが敵より烈しく放る乱丸久留島が急所に中まべ強氣の士ふれど爭でか堪ぬき其仆きて息絶へさう此時

までも兵士等ハ只久留島に鼓動せられて斯の如くに働らきつゝ頼を切たる隊長の撃仆されしを見るようもなや砲發まる擬勢もなく忽ち陣屋に火を放ち烟りに紛まく散々ふ何処とも ふく落失せしゝ官軍直ちふ山上に至りて稍久保山を乗取るう此他過激の賊兵等が這所彼所の切所を固めく少しく防戦に及びしも官軍の兵威高大ふして向ふに前のみうしゝ姑くとそ支へも

まで咸散々に討ふされて敗走に及びしかば今い
ちや佐賀一城とあまべ官軍齊しく之に逼りて一
挙に乗破らんとせしに先ち城中に降旗を立て
賊頭木原義四郎なる者總代として城を立出ぐ
官軍の陣前に至りて願書一通差出せば同黨副嶋
謙助も来りて俱に謹んで降伏を請へりまに
依て諸軍に令して先づ休戦の赴きを傳へ木原
副島の両名にその情實を詰問あるに実に解悟
恭順の旨陣謝に及びたりしかば此赴き彼徒々と
本営に進達ありぞ是に於て内務卿は彼の賊
徒等が處置方を諸将を聚めて議せらるに渠に
り出せし歎願書に不都合の文意ありて其
侭に差戻せり然るに賊徒より既に降伏を
願ひ趣きなりしかば休戦三日に及べるうち
城中種々の議論あり巨魁江藤等甲乙ハ空しく
降人とあらんより一先此城を脱走して是迄同論を主

賊頭等脱城と決して遺文を綴る

張せる他縣の士族も勘りゝねバ尚も夫等と相議し
て再び支を挙ぐんべ憂國の素意貫きゞゝと欲て二
通の遺文を綴りゝ城中より留め置き江藤島を始め
とゝ将分の者大方いゝる拔々ふ脱城せゝ残る賊
徒ハ為べきかうなく悉く城を開きて軍門に降る
官兵是等を縛し就しめ直ちに總軍入城しゝ
黙撿し及びしゝ江藤等い言ふも更なり其餘も脱賊
勘りゝねべ猛可し近國の縣々へ令して厳しく行方を

探索なり余べ佐賀縣の暴動ハ茲に平定為りゝ
バ内務卿をたゞめとしゝ總て三月一日に入城し及バ
つ此旨作ち電信をもて東京に奏せらるれバ朝廷に
置せられゝも既に東伏見宮を賊徒征討の總督
としゝ近衛兵二聯隊を引率し及たゝ此日発艦
せゝる近し御配慮在せたる事ゆへ此電報
を聞しゝ召されゝ感最も浅りゝび尚残黨追
捕の旨仰せ出されたりしゝ厚く各縣へ令を布し

其踪蹟を探索るきしめ諸軍の労を慰まる所なり
此時岩村権令ふも小倉より帰着ゆり則ち管下の
人民を宜しく按撫せし程よ佐賀縣下ち平穏よ至
り士民等歓びなりそ

明治大平記七編巻之一終